

アカタテハは食草のイラクサ、カラムシ、ヤブマオ、ラミーなどが近所に自生していないため松波町や西畑地区では見る機会が少ないチョウですが、日本では北海道から八重山諸島まで広く分布している普通種です。秋に活動した後チョウのまま冬を越し（越冬）、通常暖かくなった早春に再び活動しますが、冬の間の小春日和に野外に飛び出して日向ぼっこをするヒョウキンなどところがあります。アカタテハのように成虫のまま越冬するチョウは少なくありませんが、いったいどこでどんな状態で寒さをしのいでいるのか詳しいことはほとんど分かっていません。私は一度だけ、郷里の高知市で自宅物置においてあったザルの内側にじっと止まって越冬している姿を目にしたことがあり、真冬の1月上旬でも暖かい陽射しがあれば、天日干しに出したフトンの上でのんびりと陽光を楽しむ光景も見られました。

アカタテハはヒメアカタテハと同じく蜜を求めていろんな花を訪れますが、花蜜以外に、イチジク、梨、柿などの果物の果汁、あるいはカブトムシやカナブンなどに混じって樹液を吸うのも大好きなチョウです。ふしぎなことにヒメアカタテハが樹液を吸ったという観察例はありません。

アカタテハもヒメアカタテハと同じく幼虫時代、食草の葉っぱを使った巣を作って身を隠し、その巣の中で蛹になります。タテハチョウ類の幼虫はほとんどが毛虫で、背中一面にいかにも触れたら痛そうなトゲがたくさん生えていますが、この長いトゲが予想外の自衛に役立っているといったら分かりますか？鳥やクモなどの天敵が攻撃を躊躇する効果というのは想定できるでしょうが、何かのはずみで地面に落下したとき、これらのトゲがみごとなクッションとして働いて身体への衝撃を和らげるのです。チョウの幼虫のなかには身の危険を感じた際、わざとに落下して草むらの中に一瞬にして身を隠すという離れ業をもつものもいますが、毛虫のトゲがこんな自衛能をもっているとは気づかなかったでしょう？

アカタテハの学名は *Vanessa indica* で *Vanessa* はギリシア語で“華麗”を意味し、美しいはねの色彩を名前にとどめたいという命名者の気持ちがこめられています。すべてのチョウについていえることですが、チョウが真に美しいのは自然の中で生きて活動しているときです。標本にしてもいくらか美しさを残せますが、生きていたときの、特に蛹から生まれたばかりのチョウの美しい輝きは、生きていたからこそその美しさを感じます。自然状態での写真は沖縄本部半島：ヒカンザクラの名所である八重岳の林道で撮影したのですが、ヒョドリバナの花を訪れて、はねをゆっくりと開閉しながら蜜を吸う状況をビデオカメラのファインダーにとらえながら、はねの



Aug. 19, 2008 入笠山 アカタテハ

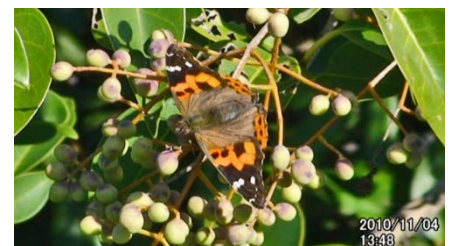
美しい赤い色彩だけでなく、後翅の地色褐色部分に密生する体毛までもが太陽光線を受けて微妙に光り輝くさまにうっとりとした見とれました。標本写真は長野の入笠山で、そのあまりに鮮やかな色彩を手元にのこしたいという衝動でネットインしてしまったものです。捕らえられるチョウの立場に立って、その痛みを思う気持ちが年々強くなるこの頃ですが、標本としてその美しさをいつまでも楽しませてもらう、せいっぱいの感謝の気持ちをこめて標本の管理



061105 沖縄八重岳

につとめています。

2010年11月、近隣のアカタテハを初めて映像としてキャッチできました。ネズミモチはすっかり実だけとなっていて吸蜜目的の飛来ではありませんが、お腹の大きなメスで越冬後に子孫を残すための産卵が期待されます。幼虫が常食とするカラムシやラミーなどのイラクサ科植物は近隣に見当たらず、街路樹のケヤキを発生源としているのかも知れませんが、確認したい課題です。



2010/11/04
13:43

Apr. 26, 2014 アカタテハ *Vanessa indica* : ケヤキを食う

日本産蝶類標準図鑑（白水、2006）に、寒冷地ではアカカテハの幼虫がケヤキ *Zelkova serrata* も食べるという記載があり、カラムシ *Boehmeria nivea var. nipononivea* がみられないのにアカタテハが観察できる近隣でもケヤキで育っているかもしれない。そのことを確認したくて今回、カラムシに産みつけられた卵からの飼育機会に、むりやりケヤキを与えてみたところ、確かにケヤキも食うことが分かった。あとはケヤキの水揚げが良好かどうかだが、カラムシの調達就容易ではない状況下、飼育は楽となる。

